

表記の「ゆれ」を再考する

柴田雅生*

けです。しかし、国際化社会、情報化社会の到来とともに、そのような「ゆれ」の現象は、かえって、教育・伝達上の障害となるおそれのあることが各方面から指摘されています。(原文横書き。縦書き用に表記を改めた箇所がある。以下でも原文が横書きの場合は同様の措置を施した。―引用者注)

ここでは表記の「ゆれ」がなるべく解消する方向に進むべきものとして扱われている。情報伝達にはコードの標準化が不可欠だからである。

ところで、「ゆれ」という用語が使われ出したのももう少し早い時期である。『日本語学大辞典』(二〇一八年刊、東京堂出版)の「ゆれ」の項(三井はるみ氏執筆)は、「ゆれ」「ゆれている」という用語が初めて現れるのは、国立国語研究所1956「語形確定のための基礎調査」である」と指摘する。そこでは「語形確定」と題されているように、音の上または文法上の語形が対象となっている。表記の要素が関わりないわけではないものの、検討の中心は語形、さらに言えば音のかたち(音韻論的な形態)であった。「ゆれ」そのものを題目とした浜田敦「ゆれ」(『国語国文』31-6、一九六二年)においても、「刻々」や「セー(身長)」「セ(背)」などを取り上げて論じている中心にあるのは、音韻としての語形のありかたである。

この「ゆれ」という用語が表記と結びつくのは、第七期国語審議会(一九六四〜六六年)での審議事項として、漢字表記と発音について「ゆれ」が取り上げられたからであるから、「ゆれ」という用語が使われ出した最初期から、表記に関しても「ゆれ」が取り沙汰されていたこととなる。

しかし、語形の「ゆれ」、あるいは、文法形式の「ゆれ」といった標

一 「ゆれ」という用語

国立国語研究所の研究報告75『現代表記のゆれ』(一九八三年、秀英出版)が公刊されてから四十年ほど経つ。日本語の研究に関わる用語として「ゆれ」が、日本語学会(旧国語学会)編集の辞典に登場するのが『国語学大辞典』(一九八〇年、東京堂出版)からであるから、ほぼ時期が共通する。おおよそ四〇年ほど前から「ゆれ」という用語が定着するようになったと見てよいだろう。

前述の研究報告は次の言葉から始まる。

日本語の表記法は複雑だといわれます。いわゆる正書法的な考え方は、これまでの日本語では成立しにくいとされてきました。一語に幾通りもの表記形式の存在を認める寛容さが特徴とされてきたわ

「標準的な形式が想定され、対する非標準形式との関係が明確となりやすい（あるいは、そうなることが期待される）「ゆれ」に対して、表記の「ゆれ」は多様な要素や条件を包含していると言わざるを得ない。標準的な形式を定めることが必ずしも容易ではなく、仮に標準的形式を設定できても非標準的形式との関係性は一樣でない。つまりは、表記の「ゆれ」とは、他の語彙や文法における語形上の「ゆれ」（以下では、語形の「ゆれ」に一括）とその性格を異にすると言わざるを得ないのではないか。以下では、このことについて、現時点で考えていることを述べていきたい。

二 表記の「ゆれ」と語形の「ゆれ」

最初に、「ゆれ」という用語がどのように説明されているかを確認する。

「ゆれ」について、前述の浜田論文では「このような現象自体が研究の対象として注目されてから日浅く、従って、術語そのものも、また概念の内容も、まだその言葉通り「ゆれ」ている状態にあると言ってよいであろう」と述べている。それが、現行の研究辞典類では、「一つの言語共同体の中で、意味が同一で形がわずかに異なる形式が二つ以上並存し、それらの現れ方の規則性が明らかでない状態」（『日本語学大辞典』「ゆれ」の項）などと定義づけられ、少なくとも「ある共時態において、二つ以上の形式が並存していること」という点においてはほぼ共通の認識に至っているものと思われる。そして、その「ゆれ」が見られる対象として、多くの研究辞典類で、音声・音韻、語彙、文法、表記、敬語、慣用句を掲げている。

しかしその一方で、『日本語大事典』（二〇一四年、朝倉書店）の「ゆれ」の項（真田信治氏執筆）のように、表記について実質的に言及していないと考えられるものも存在する。外来語に関する「ゆれ」として「ピニル／ビニール」「アイデア／アイディア」「スコップ／シャベル」などが挙げられていることから、仮名表記について言及しているとも言えなくもないが、主たる対象は語形の「ゆれ」であって、表記の「ゆれ」に直接触れる部分はない。意識的に表記の「ゆれ」を除いたのは判然としないものの、語形の「ゆれ」とは異なるものがあると捉えた可能性はあるだろうと考える。

では、なぜ表記の「ゆれ」が、「ゆれ」という現象の中で、その扱いが必ずしも固定化されないのか。それは、「ゆれ」という用語が適用される基本的な対象が語形の「ゆれ」にあって、表記の「ゆれ」という時には、語形の「ゆれ」には関与しない要素を多く含まざるを得ないからではないかと考える。

冒頭に掲げた『現代表記のゆれ』では、「表記のゆれと語形のゆれ」と題する部分で（一七頁）、

語形のゆれは、カナなどの表音文字をもちいたばあいは、表記のゆれと混同されやすい（漢字をもちいるばあいは、／キョウソン（共存）／と／キョウソン（共存）／のように、表記のレベルでは対立は解消してしまう）。

と述べた後で、

新聞の調査では、／ムズカシイ／という見出し語の表記形として、

第一段階では、つぎの五形が採集された。

〃難しい〃、〃ムズかしい〃、〃むずかしい〃、〃むづかしい〃、
〃むつかしい〃

(〃で挟まれた部分が語形を表すのに対して、〃に挟まれた部分は表記形式であることを示す。―引用者注)

という結果を、表記の「ゆれ」としては「〃むつかしい〃は〃むづかしい〃で代表させることとした。」とする。「見出し語」とは、「ゆれ」という現象が見られる範囲を規定するために設けた概念の謂いであるが、このような措置をとったのは、〃むづかしい〃という表記形式をそのまま一つの「ゆれ」として認定することは「表記のゆれ」と語形のゆれが無秩序に混在するおそれがあったからである。つまり、仮名表記同士を扱う場合(特に外来語の場合)、語形のゆれと紛れないよう、細心の注意が必要であると指摘している。

ただし、〃難しい〃という漢字を含む表記形式はそのままムズカシイの一表記形式として認定される。語形としてムズカシイが期待されるからであるが、そこには語形上の対立は存在しない。語形上の対立がないからこそ、同一の語に対応する複数の表記形式が表記の「ゆれ」として認定されるのは当然である。

しかし、その場合の表記の「ゆれ」は、共時態における複数の形式の並存であることに違はないものの、表記がもつ視覚的要素の影響を顧慮していないのではないかと思われる。視覚的要素の影響とは主にその表記形式で表される語の意味に関することがらである。〃難しい〃という表記形式と〃むづかしい〃という表記形式は、それが表す意味になにがしかの違いがあって、二つの表記形式が並存しているのではないか。

語形の「ゆれ」においても、それが語に関するものである限り、意味とは無関係ではありえない。けれども、表記の「ゆれ」は、それが対象とする範囲が、文字種の対立(漢字―かな―カナ)や同一文字種内の対立(同訓異字、常用漢字表と表外字など)、仮名遣い、送り仮名などと広範囲にわたる。語形の「ゆれ」とは大いに異なり、むしろ、意味の違いや使い分けを関わる場合が多いのではないかと考える。

再三取り上げている『現代表記のゆれ』でも、もちろん意味について言及している。「ゆれの要因」として「意味・用法の差に対応するゆれ」を挙げるのをはじめとして、「語形表示のためのゆれ」や「語形強調のためのゆれ」などを示している(三二―三三頁)。これらと並んで「新旧の差によるゆれ」と「無意図的なゆれ」も挙げられているものの、「新旧の差によるゆれ」は常用漢字と表外字との対立、現代仮名遣いと旧仮名遣いの対立、および両者に付随して起こるものにはほぼ限定される。「無意図的なゆれ」とは、言うまでもなく「ゆれ」の要因が不明なものであるから、全体を通して主要な要因は意味にあると述べているのである。それならば、形式的には確かに「ゆれ」ではいるものの、表記形式の違いが意味・用法によって使い分けられていることに焦点を当てるべきではないかと思う。

三 表記の「ゆれ」が意味するもの

本稿では、表記の「ゆれ」は語形の「ゆれ」とはその内実が大きく異なることを指摘した。私としては、表記についてはむしろ「ゆれ」という概念の適用に慎重であるべきであろうと考える。「ゆれ」と言う前に、まずは複数の表記形式が並存する理由を十分に解き明かす必要があるの

ではないか。その際には「ゆれ」ではなく、「並存」もしくは「共存」といった用語の方が適切ではないだろうか。

前掲の国立国語研究所の報告は、一九八〇年代制定の常用漢字表および現代仮名遣いに関連する成果であり、標準的な表記を目指すものであった。このような標準化の文脈において、「ゆれ」という用語はふさわしいが、それを一般的な、特に歴史的な文献の表記に関わらせることについてはより限定的であるべきだろう。

このような文章を認めたのは、かつて、冒頭で触れた国立国語研究所報告に刺激されて、院政期の資料の表記を論ずるにあたり「ゆれ」という用語を用いたことがあったからである（『打聞集』に見える表記のゆれについて、『活水論文集 日本文学科編』31、一九八八年）。思えば、必ずしも適切な用語ではなかったと今は考えている。

高島俊男氏は『漢字と日本人』（二〇一六年、講談社）において「昔は、同じことばは表記を変えて変化をつけるのがむしろふつうだった。」（三二五頁）と述べ、上田秋成『胆大小心録』の例を挙げている。むしろこのような指摘を具体的かつ総合的な調査によって裏付けることが、日本語の表記について残された課題の一つではないかと考える。